「聖徳太子はいなかった」説の誕生と終焉

駒澤大学 名誉教授 石井 公成

はじめに

私はお坊さんでも熱心な聖徳太子信奉者でもなく、血も涙もない文献学が専門ですが、これまで聖徳太子の役割を重視し、「聖徳太子はいなかった説」を撃破してきました。本日は、『週刊○△』仏教スクープ班といった感じで、「いなかった」説の裏事情をお話ししたいと思います。

聖徳太子観の変遷

二千何百年の仏教史は、実はお釈迦さまのイメージの変遷史なんですね。初期の経典には、お釈迦さまは親しみ深く、にこやかな顔で自分から話しかける人である、と述べた経もあります。ところが後の経典となると、生まれた瞬間に宇宙を飛んだなどといった超人的な描写が増えていきます。大乗仏教が誕生すると、お釈迦様が涅槃に入ったのは方便であって、実際には永遠の存在だとされます。中国の禅宗では、お釈迦さまはお経を説いたが、弟子の摩訶迦葉には、より深い真理を言葉でなく以心伝心で伝え禅宗の開祖になったとします。時代によってお釈迦さまのイメージが変わっていくわけです。

これに対して、日本仏教史は、聖徳太子のイメージの変遷史ですね。私の考えでは、聖徳太子の晩年の頃は、太子は亡くなったら天に生まれ、天からまたこの地に生まれて修行し、さらに死んで天に生まれ、ということを何回か繰り返して仏になるお方と考えられていたと思います。つまり、兜率天から降臨してインドの王家に生まれたお釈迦さまに似ていて、次の仏となる有力候補という見方ですね。

奈良時代になると、中国の南岳慧思禅師の生まれ変わりとされ、以後も観音様の化身だとか、『勝鬘経』を説いた勝鬘夫人の生まれ変わりだといった伝承が生まれました。中世になって浄土信仰が強まると、極楽浄土への導き手とされ、戦国時代には守屋を打ち破った戦いの神様とされ、江戸時代には四天王寺を造ったので大工の先祖となります。明治後期には外交の偉人とされ、太平洋戦争中は天皇絶対主義の元祖とされ、戦後は平和主義・民主主義の元祖となります。日本の歴史上、これほどイメージが変わった人はいません。

その聖徳太子は、江戸時代初期から批判され始めます。崇峻天皇を殺した蘇我馬子と一緒に政治を執ったと非難され、神国日本に仏教を入れたのはけしからんと言われました。日本を悪くしたのは太子だと説く儒者までいたほどです。

明治に近代的な学問が始まると、久米邦武は聖徳太子関連の資料を信頼度によって分類し、太子が黒い馬に乗って富士山まで飛んでいったなどという記述を後代の伝説として否定しました。久米は、明治の初めに外交使節として西洋諸国を視察し、産業の盛んさとキリスト教の盛んさに衝撃を受けた人です。当時の西洋は、日本は野蛮だと見下していましたので、久米は、日本にもキリスト教は早くに入っており、聖徳太子が厩で生まれたという伝承は、中国から伝わっていたキリスト教の影響だと論じたのです。これは事実ではありませんが。

聖徳太子奉賛会の設立

明治初期は廃仏毀釈により、お寺は大打撃を受けました。法隆寺ではお坊さんが七人しかいなくなり、興福寺ではお坊さんが全員、春日大社の神主さんになってしまいました。

明治政府は、国学の影響により、神道を国家の方針としようとしたのですが、神道は教理が弱いですし、すぐれた美術作品もあまりありません。海外に日本の文化を誇るには、仏教美術が第一となるわけです。そのため、仏教を貴重な文化財として重視しようという気運が生まれました。それを推進した一人が、法隆寺非再建論を主張した平子鐸嶺です。平子が若くして亡くなると、岡倉天心や東京美術学校校長の正木直彦や東大国史学の黒板勝美助教授たちが、平子の遺志を受け継いで活動を始めます。

この人たちや法隆寺管長の佐伯定胤は、大正十年の太子の千三百年遠忌法要を盛大に行おうとしました。しかし、正木や黒板が渋沢栄一に事業への協力を頼みにいったところ、水戸学の影響を受けていた渋沢は、「自分は聖徳太子は嫌いだ。そんな事業には協力できない」と断りました。そこで、「聖徳太子は皇室の権威を確立した方であって、文化を発展させた偉人なのです」と説得すると、渋沢は納得して引き受けてくれました。そして、皇族を総裁、徳川将軍の跡継ぎを会長とし、自分は副会長となって事業を進めました。

◆聖徳太子研究の進展

その結果、聖徳太子奉賛会ができ、研究に助成金を出したため、近代的な太子研究が進みました。最初は、法隆寺は世界で最も古い木造建築である点をアピールしようとして、建築関連の助成をしました。

大正の末になると、聖徳太子の事績を疑う説が出始めました。それに対して、東大印度哲学科の花山信勝が大正十五年に助成を受け、『法華義疏』は太子作だとする精密な文献研究を発表します。昭和二年には東大国史学の坂本太郎が「大化改新を中心したる史的研究」をおこない、皇室の権威を確立した大化改新を準備したのは推古朝の聖徳太子の諸改革だと論じました。

戦後になると、太子奉讃の立場でない研究も始まりました。昭和二十一年には東大国史学の井上光貞が「奈良時代の浄土思想の研究」という助成研究をしています。早稲田の大学院生だった私も、昭和五十七年に「初期日本華厳教学の研究」で助成を受け、奈良時代の華厳宗における三経義疏の受容を検討しました。井上先生も私も太子の周辺を客観的に扱ったわけです。

四天王寺絵堂「聖徳太子絵伝」第四面部分（杉本健吉 筆）

◆学界の研究動向の変化

東大は奉讃の立場で聖徳太子研究をする拠点でした。印度哲学研究を創始した高楠順次郎も、最初に宗教学講座を作った姉崎正治も熱烈な聖徳太子信奉者でした。姉崎は『法華義疏』の複写の字を切り貼りした「憲法十七条」を作り、天皇にご進講するほどでした。黒板は東大国史学の確立者であって、後継者が坂本太郎です。

昭和初期にナショナリズムが高まってくると、法学部の小野清一郎が「憲法十七条」を明治憲法の先駆として国家主義的な太子礼賛を始めます。その「憲法十七条」は、「承詔必謹」、天皇の詔を承ったら必ず謹んで従えと説いていますので、太子は天皇絶対主義の先駆者として評価されたのです。戦時中は、国民が和して一体となって戦争に勝利するのだということで、「和を以て貴しと為す」の「和」が重視されました。

戦後の聖徳太子観の見直し

戦後になると、聖徳太子の見直しが始まります。花山信勝は、戦時中は聖徳太子の精神で勝つのだという方向の本を文部省から出していま

した。ところが、八月十五日に昭和天皇の終戦の詔勅を聞くと豹変します。日本は日清・日露戦争に勝って以来、「武」の面に走り過ぎたが、日本はもともと「文」の国、文化の国だったのだ。だから、本来の姿に立ち返るべきであって、その手本は聖徳太子だとして、翌日から『勝鬘経義疏』の注釈本の執筆に取り組みました。戦後になっても、聖徳太子尊重は変わらなかったのです。聖徳太子はいろいろな面を持っており、人は自分の主張に都合がいい面だけを見ようとしますので、そうしたことが可能なのです。

太子尊重派は、戦後は、聖徳太子は海外の文化を取り入れ、氏族にとらわれずに人材登用をした、といった面を強調し、教科書もそうした説明になりました。太子信奉者であった東大国史の黒板勝美や坂本太郎などが、日本の歴史学の主流だったからです。ただ、戦時中の聖徳太子礼賛の風潮に反発した研究者たちは、伝説が目立つ太子の事績を疑うようになりました。

◆聖徳太子の事蹟を疑う系譜

聖徳太子の事績を疑った最初は、江戸時代終わり頃の狩谷棭斎です。『文教温古批考』で、「憲法十七条」は太子の作と思われているが、『日本書紀』の編者の潤色だろうと説きました。この立場を受け継いだのが、私の恩師筋にあたる早稲田の津田左右吉です。津田はそれ以前に書いた論文をまとめた昭和五年の『日本上代史研究』で、「憲法十七条」は律令の制定期に政府のある者が儒教の学者に作成させたのだろうと推測しました。また、聖徳太子の『勝鬘経』講義や「三経義疏」執筆は疑わしいと述べました。その津田が依頼されて東大法学部に講義に行ったところ、津田説に反発する右翼学生たちが津田の授業に押し掛け、何時間もつるし上げたのです。彼らの指導者であって熱烈な太子信奉者であった原理日本社の蓑田胸喜は、皇室の伝統を否定したとして津田を不敬罪で訴え、津田は大学を退くことになりました。

このように津田は学界の通説を大胆に疑ったのに、早稲田でその後を継ぐ人たちは、「津田先生、津田先生」と持ち上げるばかりでした。私は院生時代はかなりとがっていたため、友人たちに津田説の問題点を説いていたところ、ある先生は、「石井君は津田先生を批判しているらしい」と犯罪人のように語っていたそうです。

太子の事績を疑った研究者の中で重要なのは、小倉豊文です。小倉は、都から離れた斑鳩で「世間虚仮」、世間はむなしいとつぶやかざるをえなかった人間らしい聖徳太子を敬慕していました。広島の学校の教師となりましたが、戦時中は学生は勤労動員ばかりで授業がないため、四天王寺に入りびたって太子研究をしており、太子研究の雑誌も編集して出していました。

小倉は、太子関連の資料を空襲で焼かれたため、戦後は地方史研究などに打ち込みます。しかし、日本がまた再軍備を始めたため、聖徳太子を無暗に礼賛して国家主義に利用した戦前・戦中の歴史を繰り返さないため、昭和二十八年に「三経義疏」の太子撰述を疑う論文を書きました。また、伝説的な太子のイメージに縛られずに研究するため、生前の名は「厩戸王」だったろうとしてその名前で呼ぶことにし、その立場で太子の伝記を書こうとします。しかし、完成できず、「厩戸王」の名も論証できませんでした。

小倉が昭和三十八年の『聖徳太子と聖徳太子信仰』で触れたこの「厩戸王」という名を、九州大学の田村円澄は、翌年刊行された中公新書の『聖徳太子―斑鳩宮の争い―』において説明無しで用いました。信仰上の名は聖徳太子、歴史的人物としては「厩戸王」という形で区別して使ったのです。そのため、古代の文献には出てこない「厩戸王」という名が次第に広まり、実名だと勘違いされるようになったのです。

この頃から、聖徳太子の事績を疑う研究こそが近代的な研究なのだとする風潮が広まりました。それに拍車をかけたのが、敦煌文書の世界的な権威であった藤枝晃です。敦煌文書中から『勝鬘経義疏』と七割まで一致する注釈が出てきたため、藤枝は、昭和五十年に出た岩波の思想大系の『聖徳太子』において、『勝鬘経義疏』は中国の二流の注釈を遣隋使が持って帰ってきたものだと論じました。仏教学者は内容から見てこれに反対しましたが、教理にうとい古代史学者たちは藤枝説に飛びついたのです。

◆トンデモ聖徳太子説の先駆

古代の仏教的な聖徳太子のイメージは、中世では大きく変わりました。鎌倉時代の密教神道書である『鼻帰書』は、天照大神がインドへ行ってお釈迦様となったとし、聖徳太子も実は天照大神の化身であると説いたのです。これは、中国の儒教と道教が論争した時の図式です。仏

教側は、お釈迦様が野蛮な中国を教化する際、まず弟子を派遣したのであって、それが孔子やその弟子たちだと説きました。逆に道教側は、老子が砂漠を渡って釈迦となり、野蛮なインド人を教化したと主張しました。この図式が日本の神道に取り入れられたのです。

仏教が説く垂迹思想は、日本の神々は、インドの仏菩薩が日本を教化するため、神として現れたものだというものです。しかし、蒙古の襲来をはねかえした結果、神が日本を守ったということで神の地位が高まり、逆に日本の神がインドの仏菩薩の元であると主張されたのです。

そうした主張を受けて室町時代に生まれたのが、吉田兼倶の『唯一神道名法要集』です。「憲法十七条」は「篤く三宝を敬え」、仏教を敬いなさいと言うだけで、「神」という言葉は一度も出てきません。これは神道側にとっては困るわけです。そこで兼倶は、上宮太子、つまり聖徳太子は、「日本が種であって、それが中国で枝葉になり、インドで花や実となった。花や実は地面に落ちて根に返るように、仏教は日本から発してインドに至り、インドから日本に帰ってきたのです」と推古天皇に説明した、という話を作り上げました。

江戸時代になると、その吉田神道などの影響を受けて、『先代旧事本紀大成経』という七十二巻もの偽書が作られます。この『先代旧事本紀大成経』には、聖徳太子が作成したとされる五つの憲法が含まれていました。最初の「通憲憲法」は、通常の「憲法十七条」を少しだけ変えたものです。第二条の「篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり」という部分を第十七条に回し、「篤く三法を敬え。三法とは、儒・仏・神なり」と改めました。太子は儒教・仏教・神道の三つを尊重せよと命じた、ということにしたのです。

この『先代旧事大成経』は偽作と判定され、版木は焼却されたうえ、出版した者たちは流罪にされましたが、「聖徳太子五憲法」は人気があり、長く読まれました。廃仏毀釈をおこなったほど神道を重視した明治初期には、本物の「憲法十七条」より人気があったのです。

◆作家や古代ライターのトンデモ聖徳太子説

戦後に学界が聖徳太子の事績を疑うようになる前に登場したのが、破天荒な作家の坂口安吾です。安吾は昭和二十六年に発表した「飛鳥の幻」では、蘇我氏本宗家が滅亡する場面を『日本書紀』が異様な敵意をもって描いていることに注目し、蘇我蝦夷か入鹿が天皇だったことを隠そうとしたためだろう、という大胆な推理を述べました。これは面白い見方と言えますね。

その後、登場したのが梅原猛でした。トンデモ説の親玉です。梅原は昭和四十七年の『隠された十字架』で、法隆寺は聖徳太子の怨霊を鎮めるための寺だと断言し、ベストセラーとなりました。私が「聖徳太子研究の最前線」ブログで指摘したように、間違いだらけなのですが、この影響で、「学者は頭が固いため、専門外の人の方が自由な視点で発見ができる」ということになり、素人のトンデモ本が増えました。

東大インド哲学科の中村元先生は、聖徳太子びいきだったため、梅原の本を読んで腹を立てていたのですが、対談となると、梅原は「私は聖徳太子を尊敬しています。太子は亡くなった後に怨霊になったと書いたけれど、太子そのものは大偉人です」と太子を絶讃したため、中村先生は感心し、まるめこまれてしまいました。

昭和五十五年に連載が始まった山岸涼子の漫画、『日出処の天子』になると、聖徳太子は超能力を持った絶世の美少年であって蘇我毛人(蝦夷)を愛した、というボーイズラブ物語になります。昭和六十年の高野勉『聖徳太子暗殺論』は、聖徳太子は蘇我馬子の長男で飛鳥寺の監督となった善徳であって、後に中大兄に暗殺されたなどと書いています。その後、話題になったのが古田武彦です。古田は、親鸞に関する着実な文献研究で知られたのですが、九州王朝説を唱えるようになってからは強引なトンデモ説となり、法隆寺に残る太子関連の資料は九州王朝のものだと論じました。

イタリアレストラン出身の作家、関裕二は、平成三年の『聖徳太子は蘇我入鹿だった』において、太子の事績は入鹿の事績を書き換えたものだと主張

石井　公成
駒澤大学 名誉教授

1950年、東京都に生まれる。早稲田大学大学院文学研究科博士課程東洋哲学専攻単位取得退学。博士（文学）。現在、駒澤大学名誉教授。アジア諸国の仏教教理、および諸国の文学・芸能・近代ナショナリズム・酒・冗談と仏教の関係などを研究。主著に『華厳思想の研究』『聖徳太子―実像と伝説の間』『<ものまね>の歴史―仏教・笑い・芸能』『東アジア仏教史』などがある。「聖徳太子研究の最前線」ブログ（https://blog.goo.ne.jp/kosei-gooblog/）を運営中。

しました。関は、以後も古代史について何十冊もの本を出していますが、研究成果を無視した粗雑な空想本ばかりです。ノストラダムスの予言書を取り上げて大ベストセラーにした五島勉が、『聖徳太子「未来記」の秘予言』を刊行したのもこの年です。

翌年に出た石渡信一郎『聖徳太子はいなかった』は、聖徳太子は天武天皇が創作したとし、後に天皇家と藤原不比等が創作したと説を変えました。その翌年に刊行された小林恵子の『聖徳太子の正体』は、太子は海を渡ってやってきた北方遊牧民族の首領だと説くトンデモ本です。

大山誠一氏「虚構説」の終焉

こうしたひどい状況の中で、学問の世界から出てきたのが大山誠一氏です。大山氏は、聖徳太子を客観的に見るようになった東大の井上光貞の弟子です。大山氏が、「三経義疏」など当時の日本の仏教知識で書けるはずないですねと言ったら、井上はそれを認めておりながら、後に「百済や高句麗から来た坊さんなどの太子学団が作成し、それを太子作としたのだ」と論じたため、大山氏は師に失望したそうです。

井上光貞の東大の後継者とはならず、歴史学科がない中部大学の教員となった大山氏は、名古屋近辺の大学教員となっていた優秀な二人、上智大学出身で仏教史研究者の吉田一彦さん、筑波大学出身の道教文化研究者であった増尾伸一郎さんと意気投合しました。そこで、黒板・坂本路線による聖徳太子中心の古代史パラダイムをひっくり返そうとしていた大山氏は、平成八年の「聖徳太子研究の再検討」という論文以来、「聖徳太子」と呼ばれる偉人の存在を否定する論文や著書を発表してゆきます。藤原不比等が儒教、長屋王が道教、唐での留学から帰ったばかりの学僧の道慈が仏教を担当し、ぱっとしない王族の厩戸王をモデルにして、律令制における理想的な天皇像の模範となるような人物を造型したのであって、実際に執筆したのは道慈だと論じたのです。

この図式は、政治史の大山氏、道教研究の増尾さん、仏教史の吉田さんという組み合わせと似ていますね。大山氏は、法隆寺に残る太子関連の遺物はすべて後代の偽作にすぎず、この太子信仰をさらに進めて偽作を増やしたのは、奈良時代の行信と光明皇后だと主張しました。大山氏は一般向けの本も書いて話題になったため、この説が広まりました。吉田さんも、道慈作文説を補強する論文などを次々に発表しました。これが「聖徳太子はいなかった」説です。

◆大山説に対する様々な反論

大山氏は、以後、「私の説に反論はない」と豪語し続けていますが、実は発表当初から様々な反論がなされていました。ただ、大山氏以外でも、別の立場から聖徳太子の事績を疑う研究者が当時はかなりおりました。この人たちは、大山氏と違って全面否定ではなく、聖徳太子はある程度の活躍はしたが、これとこれについては怪しいといった立場です。この系統でも「厩戸王」と呼ぶ人が増えたため、ついには文科省の学習指導要領がこちらを優先しそうになったわけです。しかし、「厩戸王」という名は古代の文献には見えませんし、聖徳太子は千何百年にわたり日本の文化に影響を与え続けたのですから、聖徳太子という名前を教えないとなると、日本の歴史・文化を教えないことになります。

さて、大山説に対する痛烈な批判は、森博達さんによるものです。大山説では『日本書紀』の太子関連の記述は道慈が書いたとしますが、森さんは、「憲法十七条」を含めて『日本書紀』の厩戸皇子関連の漢文には和習が目立つため、中国に十六年もいた道慈の文章のはずがなく、大山説は妄想だと批判しました。いなかった派は、漢文を文章として読むことができず、単語だけ拾ってあれこれ想像していたのですね。大山氏は、森さんが「憲法十七条」は和習が目立つ後代の作だという論文を書いた頃は、自説の補強になると見てその論文を高く評価したのですが、批判されたら一切触れなくなりました。

他にも、天皇になっていない厩戸皇子を天皇の模範として描くというのは不自然であるため、皇太子の見本として描いたのではないかとする本間満氏などの指摘もありました。また、東野治之先生は、大山氏が後代の作とした法隆寺金堂の釈迦三尊像銘を間近で観察したうえで、建立当時のものと報告されました。

太子の有力さを裏付けたのは考古学です。大山氏は文献を疑うだけであって、考古学や美術史など物を扱う学問の研究成果を無視するのですが、日本最初の本格寺院は蘇我馬子の飛鳥寺、次が推古天皇の宮を改めた豊浦寺、次が現在の法隆寺の前身である若草伽藍、そして四天王寺

という順序で瓦が作られていることが判明しています。当時は天皇の宮殿すら掘立柱でした。一方、お寺は強固な地固めをした上で、礎石の上に巨大な柱を立て、屋根に重い瓦をたくさん敷くわけです。そうした寺を、中国南朝の技術を取り入れた百済から技術者を派遣してもらって造営したのです。大山氏は、厩戸王は都から遠く離れた斑鳩の地に宮を建て、推古朝には四十六もあった寺の一つを建てただけと説いたのですが、そんなものではありません。

あと太子道も重要です。飛鳥の都と斑鳩の間の二〇キロほどを、斜め一直線に結ぶ道が建設されたのです。発掘の結果、太子道は幅が一九メートルほどで、両側に三メートルくらいの側溝が掘られていたことが分かっています。日本の総理大臣で、国会議事堂から自分の選挙区までの二〇キロほどを斜め一直線の道路で結べる人がいますか。ありえるとしたら、田中角栄くらいでしょう。蘇我馬子がそうした存在だったのであって、太子から見れば馬子は大伯父であって義父でもありました。斑鳩は水陸交通の要衝の地ですので、田舎扱いはできません。

◆石井公成の登場、発見の数々

「三経義疏」を疑った津田左右吉の弟子の福井康順先生も、「三経義疏」のうち『維摩経義疏』だけは後代の作と論じました。早稲田は懐疑派の拠点だったのです。その福井先生の弟子に習ったのが私です。私は大学院当時は聖徳太子研究もやっていたものの、その後しばらく遠ざかっていました。ただ、大山説がでたらめすぎて放置できなかったため、太子研究に復帰し、様々な重要な発見をしたのです。ですから、大山氏の一番の功績は、私を怒らせて本気で太子研究に取り組ませたことかもしれません。

私は、大正大蔵経の電子版をネット公開したチームの中心メンバーでしたので、仏典の検索はお手のものでした。最初に発見したのは、「憲法十七条」の第一条のうち、「忤ふこと無きを宗とせよ」の「無忤」、つまり、かっとなってさからわないという言葉の典拠です。この表現は中国の古典には見えません。ただ、成実涅槃学派と私が呼んでいる中国南朝の坊さんや尼さんたちが尊重していた徳目であって、彼らの伝記に出てくるのです。しかも、この成実涅槃学派というのは、まさに「三経義疏」の種本を生みだした学派なのです。

「三経義疏」には変格漢文の語法が見られることは、花山信勝が戦前から指摘していましたが、私は「三経義疏」だけに共通して見える和風な表現がいくつもあることを発見しました。百済や高句麗から来たお坊さんが種本となる注釈を読んでくれ、それをまとめつつ、

四天王寺会本『法華経義疏』(下)
『勝鬘経義疏』(上右)、『維摩経義疏』(上左)

所々に自分の考えを書いていったのが「三経義疏」だと私は考えています。「三経義疏」の和習は、韓国の変格漢文と似た点もありますが、文が『源氏物語』のようにうねうねと長く続いています。韓国にはこうした例はありません。

また、「憲法十七条」と『勝鬘経義疏』は似た点が複数あります。たとえば、「憲法十七条」の中心となる第二条は、ひどい悪人は少ないため、きちんと教えれば従うものだと説いておりながら、仏・法・僧の三宝に帰依しないで、どうやって間違ったことを直すことができようかと、矛盾したことを強い調子で述べています。これは、三宝に帰依しないと受戒しても戒は固くないと説く『優婆塞戒経』に基づく記述であって、『勝鬘経義疏』もまさにその箇所を重視して引用しているのです。

『優婆塞戒経』は、大乗仏教の在家信者のための戒を説いた経典であって、在家信者を「在家菩薩」と呼んでいます。「憲法十七条」は第十四条で、自分より優れている人を見ても嫉妬するなと命じた部分でも、この『優婆塞戒経』の経文を用いていました。しかも『優婆塞戒経』の嫉妬禁止の部分は、在家菩薩が国王になった場合、人々を教えて悪から離れさせるべきだとした部分に見えています。つまり、「憲法十七条」は、在家菩薩が国王になった時にするべき訓戒をしているのです。

「憲法十七条」と『勝鬘経義疏』は、中国文献では儒教道徳を説く『孝経』を重視し、また法家の『管子』の文章を利用しています。法家は、徹底的に法律によって統治しようとする学派です。「憲法十七条」は仏教重視であり、『勝鬘経

義疏』は仏教経典の注釈であるのに、道徳倫理を強調する儒教文献と法による厳正な統治を説く法家の文献を利用しているのです。

『勝鬘経義疏』は、推古天皇のために聖徳太子が『勝鬘経』を講義した際の手控え、ないしはそれを訂正したものとする説もありますが、『勝鬘経』は釈尊でなく、勝鬘夫人が大乗の教えを説き、それを釈尊が是認したという内容のお経です。勝鬘夫人は国王夫妻の娘で、隣の国の王様のお妃となりました。推古天皇は、欽明天皇の娘で、異母兄弟である敏達天皇の后になっていますので、勝鬘夫人と似た立場ですね。しかも、推古天皇は仏教興隆を命じていますので、在家の菩薩とみなすこともできます。

推古天皇のための講経に『勝鬘経』が選ばれたのは、このためでしょう。また、男尊女卑の儒教が伝統である中国の『勝鬘経』の注釈は、勝鬘夫人の両親である国王夫妻が「娘は賢い」と話す箇所を、父親の慈愛を示すと解釈しているだけなのに対し、『勝鬘経義疏』では母とか妻とか女性といった面を強調して賞賛しています。つまり、推古天皇を在家菩薩である勝鬘夫人と似た面の多いすぐれたお方だとしたのです。

ここで出てくるのが遣隋使の問題です。倭国の使者は隋の皇帝に、「日出ずる処の天子が、お手紙を日没する処の天子にお送りします」という国書を届けますが、口頭で伝えたことも記録に残っています。それは、「海西の菩薩天子が仏教を再び盛んにしていると聞いております。そこで僧侶たちを留学させますのでよろしく」という内容でした。ということは、こちらは弟分の海東の菩薩天子です、ということになります。『優婆塞戒経』では、大乗仏教を信じている人は誰もが菩薩なのですから、問題ありません。

さて、在家菩薩の国王がする訓戒を取り入れた「憲法十七条」が作成されたのは、推古十二年です。十四年に在家菩薩の勝鬘夫人が説いた『勝鬘経』を、在家菩薩である推古天皇のために講経し、翌十五年には「海西の菩薩天子」に対して海東の菩薩天子として使者を送っています。つまり、これらは一連の事業なのです。

◆聖徳太子の手本は南朝仏教

太子の手本は中国の南朝仏教です。「憲法十七条」の第一条は、「和を以て貴しと為し、忤ふ無きを宗と為せ」と命じており、『優婆塞戒経』を重視していましたが、南斉の皇帝の第二皇子であって五世紀末あたりに宰相として父帝を支えた竟陵王は、『優婆塞戒経』を十回近く講義した宝亮を尊重して師事していました。その宝亮の弟子の光宅寺法雲は、『法華義疏』の種本である『法華義記』を書いた学僧です。また、竟陵王が保護していた妙智という尼は、伝記によれば人に責められても「無忤（忤ふ無し）」であって、非難されてもおだやかな「和顔」で対応し、宮中に招かれて『勝鬘経』や『維摩経』を講義しています。妙智は教理にも通じていたため、当時の人は妙智を「宗」、つまり根本の立場としたそうです。『勝鬘経』講義、「無忤」、「和」、「宗」とする、であって「憲法十七条」を含めた太子の事績とかなり重なります。

竟陵王の影響を受けたのが親戚の蕭衍で、この人が菩薩天子の代表であった梁の武帝であり、経典の講義をして注釈を書いています。竟陵王は、僧旻という学僧も尊重しており、この僧旻が書いた『勝鬘経』の注釈が、『勝鬘経義疏』の種本と推定されています。

◆聖徳太子虚構説の終焉

聖徳太子虚構説が出た頃は、若手の研究者たちが大山氏を囲んで研究会をやり、皆なで論文集を出したりしていました。長老学者にも、全面的には賛成できないが、聖徳太子の事績を大胆に疑う姿勢には共感すると述べる人などがおりました。しかし、数々の反論が出され、大山氏の主張の強引さが知られるようになったのに、大山氏は「私の説には反論がない」などと断言し続けたため、反発が強まっていき、学界では相手にされなくなっていきました。

この十年ほどは、大山説の立場で書く研究者は、大山氏しかいなくなりました。虚構説の盟友であった吉田さんも、この問題にあまり触れなくなっており、研究の重点を他の領域に移しています。逆に、聖徳太子の事績をある程度認める研究者の論文は、年々増えつつあります。

太子については、確かに史実でない伝承が多く、批判的に研究しなければならないことはたくさん残っています。ただ、大山氏流の「聖徳太子はいなかった」説は終わった、ということだけは断言して良いと思います。「厩戸王」という名も、次の指導要領が発表されたら、教科書から消えることになるでしょう。

（令和三年十一月十四日聖徳太子千四百年御聖忌記念 聖徳太子講演会より編集）

和 communication

四天王寺

第812号　令和5年1・2月号

●新年特集
新年のごあいさつ

●講話
「『聖徳太子はいなかった』説の誕生と終焉」石井 公成

●日常の中の仏教語 ⑳
「辯才天（べんざいてん）」

●四天王寺からのお知らせ
「境内への車両進入禁止について」

●もっとよく知る四天王寺
「四天王寺の年中行事 ①」

●絵で見る四天王寺聖霊会 第十九回
「聖霊会の舞楽一覧（主な現行曲）」中田 文花

●聖徳太子タイムカプセルプロジェクト
「奉納写経 奉安法要」

●四天王寺誌 温故知新
「聖徳太子と比叡山」（中） 山田 恵諦

●四天王寺の名宝
「令和五年 新春名宝展」